



宮 城 県 現代俳句協会

N E W S

2023. 1 No.47



子規の庭

星 節子

郊外に住み、秋の見馴れた風景の中で、たわわに実った柿はどこか哀愁がただよう。日毎に赤く熟れ、忘れられたように晩秋の重く垂れこめた空を彩っている。鳥たちが入れ替わりやってきては、絶好の食べ物とばかりに枝移りをし、時折甲高い声を上げながら啄んでいく。すべて食べ尽くすと、何事も無かったように辺りは静まり返り、鳥影さえない。やがて秋から冬へと季節のバトンが渡される。

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺

子規

誰しもが一度は耳にし、口ずさんだことがあると思う。

明治を代表する俳人正岡子規が静養先の松山から上京の途中、当時奈良を代表する旅館、對山樓で食べた御所柿。生涯最後の旅となり、掲句が誕生したきっかけとされている。

奈良公園からほど近くににあった旅館跡地は、日本料理店の天平倶楽部となり、あまり知られていないが「子規の庭」がある。

百数十年現存するとされる柿の古木と句碑を中心に、四季折々の景観を楽しめる草花を植え込み、作り過ぎた庭ではなく、あるがままの自然の感じに作庭された。東京根岸の子規庵の庭をどこか彷彿とさせるものがあり、この自然の素朴さこそが、今も親しまれている由縁なのかも知れない。つり鐘の形とも見える句碑の中央は柿の絵柄が大きく彫り取られ、次の句がある。

秋暮るゝ奈良の旅籠や柿の味

子規

鹿が入らないように入りの度に門に鍵を掛け、誰でもが自由に散策し庭を愛でまわることができ

る。古木を見上げ、子規になりきっていると、訪れたのは春なのに色づいた柿がくつきりと浮かび上がり、余韻を含んだ鐘の音がどこからともなく聞こえてきたような気がした。

子規は、俳句革新に最も情熱を傾けた。繊細な気候風土で生まれ、日本独特の文学で誰でも作ることのできる最短の詩であると言われ、幾多の困難に直面しても一条の光をみつければ不死鳥のように蘇り、死の間際まで詠み続けた。

日本は言霊の国と言われ、ことばそのものに力やエネルギーが宿るとされている。四季の移ろいに心耳を傾け、自然を詠む俳句こそが言霊の文芸であり、人生を豊かにし、人間形成に於いて重要なものであると思えてならない。

鈍角に犬の吠えぬ大暑かな

齋藤 伸光 (滝)

子供の頃犬を飼っていたが記憶は薄く、掲句は経験や写生ではなく、頭の中から絞り出した句である。犬の鳴き声を聴覚から視覚へと転じ、季語や表現も平明にし、私にとっては会心の作でもある。

近年は夏が異常に暑い。地球温暖化の影響らしいが、どう人類は向き合っていくのか？そんなことを思っている一句でもある。

余生とは青き色なりソーダ水

鈴木 弘子 (滝)

俳句を始めて二十数年たちますが、このところ停滞気味で、感性がわかず、いつも悩んでいます。八十代も半ばになり、老化現象なのかも知れません。掲句はこのようでありたいと思ふ本心です。

私の周りにはいつも若々しく、明るく、すつきりとした、年を感じさせない方が幾人もいます。少しでも近づけるよう努力し、余生を楽しく過ごしたいものです。

綿虫めひとの動きの先を読む

水戸 勇喜 (小熊座)

綿虫は、風のない初冬の空を浮遊する体長三ミリの程の可愛い昆虫だが、時に人の目元に飛び込み、纏い付いたりして嫌われ者でもある。また現代俳句歳時記(角川版)の綿虫例題三十数句中、生死に関わる例句が七句もあり、人間の死生観とも深い関係があるようだ。好き嫌い混在の綿虫だが、特定季節の季節だけに、もう少し付き合ってみよう。

目の玉重し次々鮭の打たれゆく

浅沼 眞規子 (陸)

我が家の近くの広瀬川に鮭が少し遡ってくる。何年か前に相馬で、鮭の頭を漁師が棍棒で打ち、加工場まで暴れないように気絶させる「鮭の頭打ち」を見た。いずれ食べる魚であっても普通ではいられなかった。その想いを込めて半端に作っていた句を推敲し掲句とした。「鮭の頭打ち」は今や機械化され、昔ながらの光景を見ることはできない。

一 句 一 葉

狐火や念仏の地に姫の髪

八島 敏 (滝)

佐佐木邦子著『黒い水』を人より紹介された。同書所収の「川」には石巻藩主の姫と家来が狐火を見ている場面がある。姫はその家来と恋仲になり、藩主を殺して、二人で南部領へ逃げた。しかし、役人に捕まり、姫は仙台城の牢屋へ。そして：。仙台藩の処刑場跡地である七北田念仏には、姫の墓が現在もある。この物語を基に狐火の句ができた。

大西日死にゆく星の未来とも

高橋 彩子 (小熊座)

過去と未来を彷徨うタイムトラベラーのアニメを観た。二〇六〇年核戦争により世界の半分が壊滅。二二〇〇年地球は消滅する。主人公は過去を変え、核戦争を引き起こさないようにするが、時間の狭間に歪みが生じ、結果未来は変えられない。ロシアウクライナ戦争、中国台湾問題、そして北朝鮮。西日を見てこの星の終りの始りを感じる。

翼まだ我にもあるか星月夜

佐藤 詠子 (海原・青山俳句工場05)

やっと子育てが終わる息子たちは夢に前進し始めました。さて自分はどうと、いつの間にか結構年齢を重ねました。少し自由になつた私にまだ翼はあるのかな。息子たちのように私もまだ夢を追いかけていたいなあと。母親として人として素直な想いを詠みました。月という標はないけれど星月夜は皆を応援してくれる輝きです。

死してなおのびる髪あり冬ぬくし

小野 道子 (小熊座)

亡くなったばかりの人に親類がああ髪がびてるねと髪を剃っていました。男の人は死後でも髪がのびるんだとその時は何の違和感も抱かず思いました。句会で高野ムツオ主宰から「髪がのびるのではなく皮膚が弛むからのびたように感じる」と教わり、長年気になっていた事が消えました。

眼閉ぢても雲が動くよ林檎園

吉 沢 美 香 (小熊座、むじな)

青森県の黒石生まれ、弘前育ち、宮城県仙台、多賀城に住んできました。今大学生ですが、高校時代から俳句を作っていました。小熊座に所属してから、目標とする句や人がたくさんできました。私は俳句が大好きです。これもたくさんの方のおかげです。今後も、一句一句良い句を目指して、自分の表現を模索していきたいです。

自らの業火に堪へて曼殊沙華

小 野 豊 (小熊座)

人類はなぜ戦争を起こすのだろうか。紛争のニュースを聞くたびに、人間の業と個人としての自分の無力さを感じる。また、二〇二〇年に新型コロナウイルスの感染が世界中に広がる三年になる。新たな変異ウイルスは、人類の傲慢に対する造物主の黙示であろうか。曼殊沙華に今の私の心象が投影されている。

指笛も鳩笛もなる獣医かな

鈴 木 ヨシ子 (秋)

鳩笛は両手を合わせて口で吹き山鳩の鳴き声のような音を出す。猫師が獲物を捕らえようと誘い出すために吹くものであるそうだ。鳩吹くとも言い、秋の季語。この句の獣医は私たち合唱団の仲間。十二月開催予定の定例演奏会のための練習日に、興じて皆の人気者、猫師を真似たのが動物を扱う獣医であったことが面白いと思った。

春潮や瓦礫の奥の水平線

池 田 紀 子 (小熊座)

俳句のノートを捲っておりましたら、東日本大震災の句に出合いました。令和五年三月十一日で十二年が経とうとしています。被災地の瓦礫は取り除かれ、今では当時が想像できないくらい綺麗に整備されています。大きな津波が引いて、静かな海となつた水平線。それでも、あの日の記憶は震災を詠んだ句に込められて消えることはありません。

ようこそ、現俳へ。

新会員紹介
(令和5年1月現在)

大槻 泰 介 (麦、駒草)

縄文の女神を恋うや霹靂神
みちのくは巨き墳なり虎が雨
天望回廊落ちていく残菊

五年前の夏、鳥海山に登った後突然俳句が浮かぶようになったのが俳句を始めたきっかけです。その後仙台のカルチャーセンターに通い始め、そして「駒草」と「麦」に投句するようになり、二〇二一年秋には、脳外科医としての記憶を俳句に止めようと思い、句集『或る脳外科医の四季』を対馬康子先生のご助力を得て出版しました。この句集を契機に様々な方と出会う事ができるようになりました。

二 木 暖 (岳、東北大学俳句会)

稚児桜弥勒菩薩は胡坐かく
高西風や聖ミカエルの鐘の音
朝寒し夢のグランドカナルかな

二木と申します。以前から母が俳句を冊子に投句していたのを見て、自らも創作してみようと、俳句の道に足を踏み入れました。もう一つのきっかけは、正岡子規に『はて知らずの記』というのがあります。これは芭蕉の『奥の細道』を模倣し、自らもその足跡をたどろうとする子規の試みでしたが、これを大学一年生の時に知り、たいへん感銘を受けました。どうぞよろしくお願いたします。

武 元 氣 (南風)

冬ぬくし髪を切るとき目をつむる
馬肥えて跳ぶとき真白なる尻尾
とんぼの翅のむかうを雲流る

私は小説が書きたくて高校で文藝部に入ったが、その難しさに打ちのめされていた時に俳句と出会った。特定の分野に絞らず、俳句・短歌・詩・小説に取り組む部の方針が奏功した。たった十七音で、読み手の頭に詠者の世界観を投影する素晴らしさ、多種多様な読み方を可能にし、受け止める俳句の器の広さに感動した。文藝部の同期・先輩とは現在も俳句を通して深い絆で結ばれている。

【報告】令和四年度研修会「インターネット句会をしてみよう」

令和四年八月十一日（木・祝） 於・仙台市中小企業活性化センター（アエル）

四月のIT研修会に引き続き、七名で開催された。前回同様、小田島渚さんがプロジェクターで現代俳句協会のホームページやインターネット句会などの利用方法などを紹介した。その後、夏雲システムを利用し、当季雑詠二句出しの句会、続いて二句出しの席題（「雁」、「九」）の句会をいずれも合評形式で行った。参加者からはとても簡単に使い、合評の時間を多く取ることができて有意義と好評であった。



（高得点三句）

- 五点 この星の出口はいつこ稲の花
五点 秋に入る九人乗りの乳母車
五点 雁渡る原爆ドーム越しの空
 歓談に割込んでくる牛蛙
 鞍みがく青年の背に夏兆す
 舌のなき蠅の舐めゆく鏡かな
 かき氷舐め脳髓の在りか知る

- 丸山千代子
星 節子
坂下 遊馬
浅沼真規子
池田 紀子
小田島 渚
渡辺誠一郎

加藤邪香『地おどろ海おどろ』評

鈴木 三山
（滝・ロマネコンティ）

著者の略歴によると、本名は加藤文彬（ふみよし）、昭和十五年三月五日兵庫県西宮市生まれ、仙台に疎開とある。戦火を逃れて仙台に疎開したのであるうか。因みに筆者は転勤で四年間西宮市に住んだことがある。

著者の俳歴は昭和四十五年頃の「河」仙台支部への入会に始まるとあるから、結構長いことが知れる。その後昭和五十五年頃に「層雲」の三浦石雨師を招聘して、三浦北曲と「花野句会」を創立したとある。「層雲」は河東碧梧桐・荻原泉井水が中心となって創刊された自由律俳句の会であり、尾崎放哉や種田山頭火、栗林一石路などを輩出している。

今回発行の句集は平成二十三年からの作品となっている。この年は忘れることの出来ない東日本大震災の起こった年である。句集のタイトルとなっている『地おどろ海おどろ』はまさにそのことであろう。

〈芒原は美しいパルスみんな行方不明〉津波ですべてが波に攫われてしまった海岸に、広がる芒原に息づいているパルスは、行方不明の人々の魂の叫びでもあらうか。〈枯木の臍いちばん深い湖である〉海岸の松林は根こそぎ津波になぎ倒された。かろうじて残った松も塩害のために枯れていった。一番深い湖が枯木の臍であるという悲しみは言い知れぬものがあるう。

〈空耳の空へ原発放牧〉大震災は津波による破壊とともに、原発事故という大惨事をも引き起こした。福島県一帯はまさに放射能地獄に見舞われることになったのである。まさにあり得ない大惨事であった。復興も覚束ないまま〈地おどろ海おどろ言の葉は水蒸気〉の状態に陥つたのである。よく筆舌に尽くし難いということがあがるが、言の葉は水蒸気となり無力化するかの如くである。

しかし自然は復活してゆく。〈古里は白い貌して滴る〉〈海見えている紫陽花のデスマスク〉〈ゴッホへ大脱走するひまわり〉〈菜の花何万本咲いてもエレジー〉自然に対して人間は老いてゆけばかりであるが〈人間あけぼの 老いはシンフォニー〉であることを信じて生きて行きたいと思うところである。なお自由律俳句には疎い身なので、勘違いの鑑賞があればご容赦の程を願いたい。

（令和四年五月発行 東誠社）

社会性俳句について

島 松柏
(荒星)

俳句の作句は個の営みであり、他の文芸同様、個の私性からは脱し得ないものであるが、生身の私たちが社会的存在でしかあり得ないように、どんな作品もまた社会性をまわざるを得ない。『俳文学大辞典』（角川書店）では、戦後の社会性俳句についての論争と活動に触れ「昭和三十五年の反安保運動挫折によって大きく挫折した」と締めくくっている。こうした歴史的な運動という意味での「社会性俳句」は狭義のものと捉え、ここではより広い意味での社会性ということについて考えたい。もつとも、それでは全ての俳句に社会性が認められるか否かという茫然とした議論になりかねないため、明らかに社会的な事象を題材として詠んだ句を「広義の社会性俳句」としたい。そしてこの「社会性俳句」には、社会詠と時代詠の二種があると考えられる。社会詠とは、同時代の社会を描写した句で、いわば横軸のみの句である。時代詠とは、それに時間的歴史的な縦軸を加えた句をいう。時代詠の典型的な例を次に挙げる。

海に出て木枯帰るところなし

山口 誓子

中学・高校の教科書にも載っている著名な句であるが、昭和十九年の発表当時から特攻隊のことではないかとの評があり、誓子も戦後になつてそれを追認したという。当時は直接には詠めないで、擬人法を用いた自然詠に仕立てた句で、時代詠と呼ぶにふさわしい。ただ過去の時代を知らない若い読者には、自然の苛酷な厳しさを受け取るだけであろう。作品は作者を離れそれだけで完結するので、それはそれで仕方がない。

社会詠については、多くの問題のうち一つだけ次に挙げたい。

白壁の銃弾痕や沙羅の花

松柏

拙句を掲げて恐縮だが、この句は安倍元首相の衝撃的な銃撃事件の後、離れた場所のビルの壁にあつた銃弾の跡をテレビで見つ詠んだものに驚いたのは、句会でこの句を出した際に、殆どの人がウクライナの戦場を連想したことである。自分の見た映像を他人も見ているだろうと思ひ込んでいたのだが、こうした例は他にもあるのだろう。少ない情報のため多様な読みをされてしまうという句の宿命が、社会詠にはとくにつきまとうと思われる。

社会性俳句を考える

それはそれとして

泉 陽太郎
(海原)

霧の車窓を広島馳せ過ぐ女声を挙げ

金子 兜太

私は今まで社会性俳句あるいは俳句の社会性について真剣に考えたことはほとんどありません。確かに俳句には独自の散文化的なものがあり、しかも散文よりも強く感性の側面から社会的なテーマに切り込み、切り取り、必ずしも結論や見解を提示することもなく、心象に残すことができるのかもしれない。一方、今の私にとつて俳句は現実逃避言つてみればファンタジーです。ふわふわとしていてしかもどこか芯があるような、低反発マットレスにゆっくりと横たわるような、そんな感覚を楽しむことが多いです。現実には忘れるもの、現実には現実だけで十分という思いがあります。だからといってファンタジーを食べて暮らしているわけはありませんので、まあ所詮は自身のただの身勝手な俳句に押し付けている、といったところでしょうか。とはいえ、例えばこの句、いかがでしょうか。まさに視覚、聴覚そして体動感覚のファンタジー。呆然とするような闇があるなかに、それでもなにか淡く切ない思いが夢の中で過ぎてゆくような、独特の浮遊感が感じられませんでしょうか。少なくとも最初は。もちろん本来の解釈はそのようなものではないと思われます。先ず、このなんとも言い難い、リズムの振れ。そして広島、がありますから。

それはそれとして、です。健全な、あるいは適切な鑑賞ではないのかもしれませんが、社会的なメッセージを内包する俳句を、そこを全く度外視して、忘れ去ってしまったて、ある意味では不謹慎に、楽しむこともまた悪くはないかもしれないと思うことがあります。その場合に限つては単なる無知がかえつて有効な道具になるかもしれません。現実や社会のあり方に、ほとほと草臥れてしまったときに。立ち向かう気力も勇氣も萎えてしまったときに。

記念講演を聞いて―詩歌の音楽性

小田島 渚

(銀漢・小熊座)

令和四年九月十八日に予定されていた第三十六回現代俳句東北大会は新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ中止となったが、木山幸子先生の記念講演「俳句のもつ感情的力―韻文と散文を比べる実験研究からの示唆―」は、先生のご協力を得て動画配信させていただけることとなった。

木山先生は、平成二十九年より東北大学大学院文学研究科言語学研究室の准教授となられ、ことばの字義以上の含みがどのようにして他者に伝わるかを考えるために、心理学的行動実験、瞳孔反応、脳機能（脳波・MRI）等による実験研究が行われている。講演の概要は次のようなものであった。

私たちは母胎の中ですでに母親を取り巻く言語に触れ、最初に感情言語を学び始める。生まれた後は、自分以外の他者に気づき、他者と関わっていきたくと思うことよって、複雑な命題言語を生涯かけて獲得していく。俳句を含めた詩は、それら命題言語と感情言語をよく統合して芸術に高めた言語芸術で、詩の美しいことばとリズムは人が人らしくあるために大きな役割を持つ。数学者バークホフは美的度合いの数式（美的度測定法）を考案し、文学を含めたあらゆる芸術で算出した結果、複雑さが減るほど美しさが増すとした。その数式によってもっとも美しいとされたテニソンの詩に見られるような適度な範囲で踏まれる韻など、散文にはない音楽的要素が、詩を読むときに生じる快い感情を生んでいる。これらを踏まえるると俳句は詩の究極の形とも言えるという。

次に瞳孔反応の実験内容が詳細に話された。瞳孔は自律神経が作用する部位で、自分の意志で拡大縮小はできないが、詩的言語を介した感情が覚醒すると拡大する。これを利用して、俳句、川柳、標語をそれぞれ四十句読み上げ、被験者の瞳孔の反応を調べた結果、瞳孔は散文より韻文に大き

く拡大し、詩や韻文が快感情を喚起することがわかった。

最後に、言葉がどうして詩になるか、つまり、言葉は、なぜ字義以上（以外）の含みを伝えることができるのかについて述べられた。これは自分以外の者が何を知り、考え、感じているのかを的確に推察する認知的共感と、他者の感情に呼応して自身も感情体験をする感情的共感を、私たちがバランスよく持つことによる。この二つの共感感は人生の長い時間をかけて獲得していくものであり、「詩の創作や鑑賞という行為には、自己を追求しながら他者の思いにも心を寄せるという人間のコミュニケーションの根源的な要素が凝縮されているのではないか」と詩が私たちに与える重要な役割が示された。

講演のなかで引用された国語学者時枝誠記の「すべての芸術が、その媒材の如何に関わらず、そこに主体の志向的感動と情緒とを表現しようとする指しているという意味で、音楽的になろうとしている」という言葉が印象深かった。金子兜太は『短詩型文学論』の中で俳句の韻律（リズム）の重要性を、時枝をはじめ久松潜一などの研究者や村野四郎、吉本隆明ら詩人の言葉を引きながら論じている。俳句は、音楽性をメロディとリズムに分けると、前者が切り捨てられたことにより、後者が極限に生かされる特性があり、そのため、倒置、衝撃、回帰といった詩的手法による効果が重層的に表れると金子はいう。造型論の結実した句として見ていいであろう金子の〈彎曲し火傷し爆心地のマラソン〉が強く心に残る理由は、音楽性の視点から考えると、その反戦的メッセージよりも躍動感あるリズムに言葉とイメージがびつたりと乗っているからではないだろうか。その金子が韻律に「やわらか体（てい）」と名付けて注目した阿部完市の〈ローソクもってみんなはなれてゆきむほん〉〈木にのぼりあざやかあざやかアフリカなど〉がもたらす快感情はどのようなメカニズムから来るのか。瞳孔をはじめ、私たちの身体にどのような反応が出ているのかが気になった。

研究者の視点からの切り取りがとて新鮮で、さまざまに考えさせられる講演であった。

「記念講演」は動画配信中です 「現代俳句協会 宮城」で検索

第36回現代俳句東北大会（宮城県）入賞作品

令和四年九月十八日に開催予定であったが紙上俳句会として実施した。

▽秋田県現代俳句協会会長賞

戦場をドラマのやうに見て酷暑

浪山 克彦

▽秀 逸 賞 銃よりも強きいのちと種を播く

浪山 克彦

夏瘦の地球人類が重過ぎる

嶺岸さとし

▽佳 作 賞 今日生きて妻と選びし夏帽子

幾世橋 廣

▽中村 和弘特選 汝も我もカインの裔か蛇を打つ

高橋 彩子

▽寺井 谷子特選 夏瘦の地球人類が重過ぎる

嶺岸さとし

▽高野ムツオ特選 涙とは吹きとばすもの大南風

小野 道子

▽秋尾 敏特選 軍艦にするな列島緑なす

土屋 遊螢

▽小林 貴子特選 繰返し天草晒す日の斑

菊地 美紀

▽渡辺誠一郎特選 銃よりも強きいのちと種を播く

浪山 克彦

▽中村 孝史特選 自然へのオマージュ夏の植樹祭

蔦 とく子

▽成田 一子特選 大海にくぢらの歌ふ立夏かな

山本 峰子

▽宮崎 哲特選 春天へ工夫が一人足場組む

大坂 宏子

▽坂下 遊馬特選 緑夜なりコトリと骨の音がする

土見敬志郎

▽鈴木 三山特選 春天へ工夫が一人足場組む

大坂 宏子

▽春日 石疼特選 三月十一日星のふえゆく海の上

佐藤 みね

▽池田 義弘特選

夏瘦の地球人類が重過ぎる

嶺岸さとし

野苺を摘む手銃持つ乙女かな

花釜 幾雄

▽江井 芳朗特選

銃よりも強きいのちと種を播く

浪山 克彦

▽宇川 啓子特選

銃よりも強きいのちと種を播く

浪山 克彦

▽佐竹 伸一特選

三味の糸はるみちのくの夏祭

八島 敏

▽東海林光代特選

野馬追の馬上の少女風光る

丸山千代子

▽堀 尚子特選

銃よりも強きいのちと種を播く

浪山 克彦

▽森田千枝子特選

ふらここのふたつは永久にすれ違ふ

丸山千代子

▽片倉 俊秀特選

警笛を鳴らせ青葉がやつてくる

鶴岡 行馬

▽船越 みよ特選

戦場をドラマのやうに見て酷暑

浪山 克彦

▽大瀬 響史特選

非常口を探す旅なり秋の蝶

伊藤 一男

▽南 美智子特選

戦場をドラマのやうに見て酷暑

浪山 克彦

▽さいとう白沙特選

戦場をドラマのやうに見て酷暑

浪山 克彦

▽五日市明子特選

石斛の花や茂吉の聴診器

八島 敏

第59回現代俳句全国大会入選作品

▽五十嵐秀彦特選

えんぴつの中に大樹の春がある

佐藤 みね

▽大瀬 響史特選

夏休み祖母と眠りしグリとグラ

永野 シン

▽神野 紗希特選

梅花藻の根を過ぎてより水迅し

永野 シン

▽衣川 次郎特選

えんぴつの中に大樹の春がある

佐藤 みね

▽山口 富雄特選

瓦礫まだ熱持つ地にも秋来たる

菊池 修市

慶祝

二〇二二年宮城県芸術祭文芸賞（宮城県知事賞） 日下 節子
二〇二二年宮城県芸術祭文芸賞（河北新報社賞） 佐藤 みね

謹悼

野田青玲子（小熊座） 令和四年六月十六日逝去 享年九十四歳
梅森 翔（滝） 令和四年十二月九日逝去 享年八十三歳
池田 紀子（小熊座） 令和四年十二月二十一日 享年八十三歳

総会案内

日時 令和五年三月二十六日（日）午後一時十五分
場所 パルシテイ仙台 五階 第二セミナー室
仙台市宮城野区榴岡四丁目一番八号
電話 〇二二―二九五―〇四〇三
参加費 千円 二句出し句会

編集室から

◆今年の第三十七回現代俳句東北大会は福島県です。青森、岩手、宮城と三年続けて当日大会はありませんでしたので、開催されることを祈るばかりです。

◆佐佐木邦子著『黒い水』。タイトルでもある「黒い水」には東日本大震災を背景に震災孤児を引き取った一人の女性の葛藤が描かれています。いま震災を日常的に語り合う姿は見かけなくなりました。語ることによって語れないことの大きさに気づかされ、その大きさに十二年分の時間がさらに重苦しさを加えているのではないかと思えます。

◆ロシアのウクライナ侵攻から一年が経とうとし、世界各国間の緊張感の高まりが日に日に顕著となっています。社会性俳句は昭和二十年代に議論が盛んでしたが、現代社会においては当然のことであり、あえて社会性と括ること自体意味がないことなのかもしれません。しかし現代の俳句表現において積極的に思考することは、今もって重要なことと考えます。本号では「社会性俳句を考える」として、島松柏氏、泉陽太郎氏にご執筆いただきました。（渚）

○表紙の写真
光のページェント（仙台市）
十二月に定禅寺通りのケヤキ並木に灯りが点る。
三十七回目を迎えた。通り沿いのせんだいメディアテークは世界的な建築家伊東豊雄の設計で館長は哲学者の鷲田清一。
うつし世に無灯のクリスマスツリー／遊馬

発行所 宮城県現代俳句協会
令和五年一月三十一日発行
発行人 渡辺誠一郎
編集部 坂下遊馬、小田島渚
事務局 〒九九九―二三五一
宮城県亘理郡亘理町北新町三二―三
坂下遊馬 方
電話 〇二二三―三四―一七八一